

和本の「注意事項」 続・虫とたたかう

橋口 侯之介（誠心堂書店）

§また虫が飛んだ

前号で、和紙を食べる虫の話を書かせていただいたところ、多くの方から感想や提言をいただいた。拙文を読んでくださったこともうれしかったが、いろいろな情報を寄せていただいたことも大いに役立った。

そうこうしているうちに、大失態をしてしまった。倉庫に三、四年置きつ放しにしていた写本に甚だしい虫害を招いてしまったのだ。

版本もできている本だし、全十冊のうち六冊しかない不揃いだったのだ、文字通りお蔵入りしていたのだが、それが見事に食われた。生きている幼虫ばかりでなく、飛び立たんとしていた親虫までぞろぞろ出てきた。まだかろうじて文字部分までかかっているないので、文章は読めるが、全体としてかなり虫穴があいている。不思議なことに、その周りの本は無事で、その本だけがやられていた。もともと虫が入っていたのを不用意にそのまま置いていたのがいけなかったのだ。前号でも紹介したよう

にシバンムシには生まれた場所に戻る習性があるので、他の本にうつらずにすんだのだろう。

そういえば、あるベテランの本屋さんから、そういう本をわざと置いておくのだと聞いたことがある。それを犠牲者にして、ほかにいかないうようにするというのだが、理にかなっているようで、かなっていないようにも思えるので、お奨めはしない。

前回申し上げたかったのは、防虫や駆除について大きな博物館や文書館などの施設では、きちんとした防除作業が実施されているが、個人や我々のような零細業者がするには大掛かりすぎて、そのまま同じことができない。とくに博物館などの駆除方法は資格のある防除作業主任者が必須な燻蒸や、有機リン系殺虫・防虫成分のある化学薬品を使用するため、一般家庭や店舗の本棚には安全面で問題がある。

そこで、安全でかつ有効な手立てがないものかと考えたのである。敵であるシバンムシの生態を知ること、天然成分主体で毒性の低い薬剤がないものかと、試行錯誤していることを紹介したのだった。

§わが家の虫退治

わが店の大失態となった虫入の写本六冊をどうしたかというところ、まず幼虫を見つけ出して殺すしかないのです、辛抱強くたたき出した。下に箱などを置いて、とんとんと叩くようにして出す。楮系の和紙を使った本は丈夫なものでこの程度で傷んだりしないので、少し強めに叩き出しても問題は

ない。出てくるわ、出てくるわ、一冊から数匹ずつは落ちてくる。

この方法が一番効果的なのだが、まだ不十分である。虫は本の綴じ代の中に入り込んでいるので、綴糸（中綴じまで）をほどいて一枚一枚ほぐして、丁寧に虫を追い出す。注意するのは、虫害によって紙がくっついてしまっているので、無理やりはがさずに慎重におこなう。

こうして、手作業でほとんどの虫を叩き出したら、次に厚めのビニール袋に密閉し、中に殺虫効果のある薬剤を入れて二、三週間置いておく。この密閉した袋の中に脱酸素剤を入れる方法もあるそうだが、それでは殺虫できなかったことを前号で書いた。そうしたら、脱酸素剤では幼虫は仮死状態になるだけで、元に戻すと「息を吹き返す」のだと教えてくださった方がいた。残念ながららわたしたちの意見が正しかったのだ。

袋にナフタリンなどの化学剤を使うのは抵抗感があるが、密閉したときだけに使うこと、以後、開放された本棚などには使用しないと考えれば、害は少ないと思う。

二、三週間たって取り出した後、もう一度点検をして、もう虫はいないとなったら、また本を綴じ直して元に戻す。ただし、この本には再び虫がつく可能性があるので、フィルム袋に密閉して保存しておくことにする。上等な本なら木箱に入れるのがよい。

袋にせよ箱にせよ密閉したところで本を保存するのに安全なのは、昔からの樟脳が一番だと思う。日本では天然の樟脳をつくる場所が減ってきており容易に入手できないが、インターネットで探すとよいものが手に入

る。宮崎産のものが香りもよく、リーズナブルな値段だった。

書画骨董や着物などを包む黄色味をおびた橙色の布があるが、これはウコンで染めたものなら防虫・防腐効果がある。上等な本はこれで包んで木箱に入れる昔からの方法は理にかなっていたわけだ。ただし、色だけがオレンジ色っぽく、ウコンを使つて染めていないものもあり、外見では容易には区別がつかないので注意がいるようだ。

樟脳は、粉状のものを多めに買って置いて、布などの小袋に入れて箱や袋に同封する。この場合、市販の防虫香を入れておくのもよいだろう。これらは一年くらいで交換しなければならないので、忘れずに時期がきたら入れ替えるべきである。また、親虫の飛ぶのを防ぎ、近寄らせないために部屋に香を焚くのもいいそうで、ある方から日光輪王寺の「輪王香」をお奨めいただいた。白檀と沈香が配合されたもので、よい香りに満たされ一石二鳥とのこと。直接お問い合わせいただきたい。

なお、博物館の方から、バボナという殺虫プレートは、有機リン系殺虫成分が入っているが、少量なら問題ないのでとのご指摘もいただいた。

§ 和本の注意事項について

こうして、虫損のことをとくに問題にするのは、貴重な文化遺産が食い荒らされる心配でもあるが、わたしたち古書業者にとつては価値の減殺を招く害虫でもあるからだ。先ほどの写本の大失態などは、まったく泣くに泣けない。もし、上等な本なら裏打ちなどの修理に出さなければならず、

かなり費用もかかってしまう。

古書の目録をつくるさい、一般の書誌学的な記述や図書館のデータと違うところがある。本の状態を示す記述を入れることである。とくに欠点を示すことが求められる。インターネットによる通販が盛んになるとますますこの表記が必須で、ネット上には「焼け・しみ・むれ・傷みあり」、「印有、箱なし」、「書き込み、赤線有」、「背に傷み、カバー欠」、「鼠のかじり跡」、「ゴキブリの糞」、「かび」……じつにいろいろな表現が飛び交っている。そのような注意事項のまったくない本が「美本」で、初版本や限定本などはプレミアがつく。ふつうの本も、それを百としたら欠点があるだけ割安にしていかなければならない。新刊ならせいぜい「落丁乱丁本はお取り替えます」くらいですむが、古本は、とにかく問題点を列記しておかないと、あとで返品だ、値引きだと面倒なことになる。

和本の場合は、虫損があるかないか、あるならどの程度か、ということ先ず書かなければならない。シバンムシは、パルプが苦手とみえて洋装本にはほとんどつかない。中国や韓国にもいないらしく、向こうの国の人は本を食べる虫がいることに逆に驚かれる。和紙だけが害をこうむるのだ。過去に虫が全く入った形跡が無い本などは稀有である。

そのほかの欠点はおおむね現代の本と同じように、しみや破れはどうか、落丁はないか、傷みはないかなどが問題になる。しかし、和本では、保存程度との兼ね合いでどこまでが問題点といえるのか、どこまでが許容範囲なのかは難しいところがある。また人によって判断基準が異なる。

ただでさえ百数十年、寛永期の本だと四百年近く経過している本に対して、昨今出来たての本と同じ用語で欠点をいいたてたら、書誌情報より多くの言葉を費やさなくてはならない。

日本の自然環境を考えると、これほどの長期にわたって保存されてきたこと自体が幸運といわざるをえない。いったん虫の餌食になったら数年で本はぼろぼろになる。それが数百年もつてきたのである。それでもまだたぐさんの本が保存されているので、そのありがたみが希薄になりがちだが、この保存状況を鑑みて考えるべきだと思う。経年変化のほかに、和本独特の歴史的な伝存のありかたを知っておく必要があるのだ。

§ 欠点も歴史のうち

昔の人はよく手に唾をつけて本をめくっていた。札束を数えるときもそうである。そのため、本の左側の下が手垢にまみれているのが、和本ではふつうの状態である。もし、これがきれいなら誰も読まなかった本で、私などは、そんなほとんど利用されてこなかったような本にはむしろ愛着が持てない。何か冷たさを感じてしまうのだ。西鶴本などは、そういう意味での「美本」は一千万円を超える高価だが、ふだんの古書市場に出てくるのは、多数の人が読んでぼろぼろになったもので、値段には大差がつく。このぼろぼろこそ本当は西鶴の人氣を証明するのだが、なかなかそういう見方をして買ってくださいる方が少ない。

読本や草双紙の類も同じことで、黄表紙などは、美本で題簽がついてい

西鶴『日本永代蔵』。左下の部分がとくに汚れた本。もうへたっている



ないと相手に
されないこと
がある。大半
は表紙が擦り
切れ、題簽は
はがれ、左下
は真っ黒であ
る。その汚れ
を化学的に計

測して、当時人気のあった本とそうでもなかった本を考えた論文もあるそ
うで、読者とともに伝存されてきた形跡にこそ、本の本当のおもしろさが
あることをよくつかんでいる。

この作品は誰が書いたか、どこで出版されたかも大事だが、その後、ど
う読まれて伝えられたかということも大事な視点で、今残っている和本は
そうした歴史の厚みの中をくぐってきたものだ。その経過が、本の傷みや
汚れに残っている。所有するならきれいな本で、というのは洋の東西を問
わず愛書家の希望だろう。しかし和本については、きれいならいいという
ものだけではないと思うのだが……。

現代の本だと、個人の印が捺してあるのも欠陥とされ、まして書き込み
があると、どんなものでも駄目といわれてしまうが、もちろん和本は逆で
ある。蔵書印は貴重だし、書き入れは価値を高めこそあれマイナスではな

い。書入本は、大半はこの誰がいつ書いたかわからない。それでも、そ
れはまさに読まれた書物そのもので、しかも自分のためにだけするのでな
く、その本が次の人に読まれることも意識して書いている。有名な学者が
書くとき高いのは以前からのことだが、無名の人の書き入れにもそれなりの
価値があるのだと思う。それも和本の伝存方法のひとつだからである。
落丁もよくある。それを現代の本と同じように問題視して、返品の対象
にするのだが、いわば昔のミスは今責任をとっているようなもので、歴史
を無視している。取替えのきかない昔の本を返品されても捨てるわけにも
いかない。戦前の和本屋さんは落丁など平気だったそうで、現代は神経質
になりすぎているのではないか。

たしかに欠陥ではあるが、それを含めて歴史遺産である。大衆本の中に
は、増刷時に手を抜いて途中を省くことはよくあった。丁付けのいい加減
な本もたくさんある。それらも本の歴史の一コマである。欠陥商品だと短
絡して考えないでほしいものだ。

東京古典会の和本の古書市場では、版本の場合にかぎり、取り引き後に
明らかになった落丁は返品ないし値引きを認めている。しかし、写本につ
いてはいつさい認めない。また、本当に落丁かどうか確認できないと応じ
ないなどの内規を定めている。

和本に関していうなら、いわゆる欠点や注意事項というのは、その本の
個性であって、その歴史的な積み重ねにこそ意義があるといえないだろう
か。私が愛着を感じるのはそういうところである。

|

個性

—いたずら書き